

# 安楽寺だより

第 5 号

2面  
3面  
4面

親鸞聖人のご生涯(その1)  
安楽寺平成二十三年法要日程  
仏教豆知識(正信偈)

編集・発行 安楽寺住職 吉田 和良  
名古屋市瑞穂区井戸田町一の八〇  
電話 〇五二(八四一)二六〇六

われもひとも

生死をはなれんところそ

諸仏のご本意にて

おわします

歎異抄

## まもなく始まる

## 御遠忌法要

宗祖親鸞聖人  
750回



御影堂前白洲

新年おめでとうございます。  
本山東本願寺では、今年三月十九日から宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要が始まります。御遠忌テーマ「今、いのちがあなたを生きている」のもと、これまでお待ち受けて法要や真宗門徒入門講座などが開催されてまいりました。

親鸞聖人は、混沌とした鎌倉時代にお釈迦様の開かれた仏教の真髄を究めようと九十年のご生涯を生きてこられました。私たち真宗門徒は、聖人の「み教え」が深く顕された『正信偈』などのお聖教などを通して自分の生き方を聞き、学んでまいりました。

御遠忌という、五十年ごとにお勤めされる聖人の年忌法要にお出かけいただき、聖人の「み教え」に出遇って頂きますよう心よりお願い申し上げます。

法要期間は三月十九日から五月二十八日までの七十一日間で、①三月十九日～二十八日 ②四月十九日～二十八日 ③五月十九日～二十八日の計三十日間は御影堂にて御遠忌のお勤めがまいります。

二十二組では二回に分かれて御遠忌法要の団体参拝を実施致します。安楽寺では三月二十一日に参拝致します。(十二月末までの申込者は六十五名)

安楽寺では参拝用の旗を作成致しました。御遠忌の団体参拝で皆様にご披露致します。

# 親鸞聖人のご生涯

## その一 道を求めて

親鸞聖人が、お生まれになったのは、今から八百年余り前、平安時代末の一一七三年(承安三年)のことです。世の中では貴族の政治に替わって、武士の政治が始まる時期で、源平の争いに代表される戦(いくさ)が起こっていました。また、飢饉や疫病のために多くの死者が京の都にあふれる状況で、社会全体が大きな不安を抱かえていた時代でした。将来が見えない中で、人々はその日その日を懸命に生きていたのです。

このような時代にあつて、親鸞聖人は出家し僧侶となつていかれます。「九歳の春の頃」であつたと伝えられています。その後比叡山に登り、二十九歳で山を下りるまで聖人は仏教を深く学ばれました。

比叡山は、伝教大師最澄によつて開かれた延暦寺を中心とする大乘仏教の道場でした。比叡山での修行は、「戒、定、慧」の「三学」といわれます。「戒」とは戒めという意味で、仏道を歩む者としての生活規範。「定」とは定めるといふ意味で、心の乱れを抑えて精神を静かに安定させようという修行。「慧」とは仏の智慧を身につけ、惑いを断ち切つて真理を悟ること。

この「三学」を段階的に修行し、さとり

## 「この私一人救われない」



聖人が堂僧時代に修行された比叡山常行堂(昨年 11 月写す)

近づいて行くことが求められていたのです。聖人が比叡山でどのような日々を送っていたかは、確かな記録は残されていませんが、常行堂(写真)の堂僧をつとめられていたことが伝えられています。聖人は修行と学問に励み、迷いを超えてさとりを開くことを求め続けられたことは間違いありません。

しかし、聖人に見えてきたのは、「三学」のどれも徹底できないという自分の姿でした。大乘仏教は「すべての人を救う」というのに、「この私一人救われない」。自分自身において成り立つ救いを求めて、苦悩の日々を送られていたと思われ

宗祖聖人御遠忌テーマ「今、いのちがあなたを生きている」

平成23年  
(2011年) **安楽寺年間法要日程**

一月一日 午前十時 修正会  
年の始めに心身を引き締め、仏恩報謝の思いで新しい年にのぞむ仏事です。(ぜんざい接待)

一月十三日 午前十時  
為磨塚法要

寺入口の為磨塚でお勤めします。大切に生きてきた仏事・神事に関わるものを焼却します。(お斎接待)

二月十三日 午前・午後  
定例法話

北條義信師

三月十三日 午前・午後  
定例法話

野呂美道師

四月十三日 午前・午後  
定例法話 (甘茶接待)

藤井秀規師

五月十三日 午前十時・午後一時半  
春季永代経法要

春季永代経法要

椰野明仁師

亡き人を偲び、仏縁を頂いたことを喜ぶと共に、仏法聴聞の大切さが子孫に伝えられる事を願ってお勤めいたします。

六月十三日 午前・午後  
定例法話

荒山 修師

七月十三日 午前・午後  
定例法話

八神正信師

八月七日 午前・午後  
孟蘭盆会法要

住職

九月十三日 午前・午後  
秋季永代経法要

竹原了珠師

十月十三日 午前十時  
定例法話

坊守

十一月十二日 午後 帰敬式

十三日 午前・午後 報恩講法要

荒山 修師

十二月十三日 午前・午後  
定例法話

定例法話

八神正信師



**帰敬式を行いました**

昨年十一月十二、十三日の報恩講には、大勢のご門徒の皆様にご参詣を頂き有難うございました。

六年前より十二日の午後、帰敬式を執行。今回は八名の皆様に受式いただきました。

全員で「三帰依文」(仏・法・僧の三宝に帰依するお言葉)を称えた後、剃刀の式を行い、そしてお一人づつに法名を伝達。受式者代表の角谷さんから「誓いのことば」をいただき、全員で正信偈をお勤めして式を終えました。

ご門徒の皆様、今年はずい受式ください。



ご本尊前にて記念写真です

◎ ご参詣をお待ち致しております。

# 仏教豆知識

第五回



## 正信偈

詳しくは『正信念仏偈』といます。  
『正信偈』は、親鸞聖人が心血そそいで著された『教行信証』という著書の中の「行巻」に書かれている「正しい信心の偈(うた)」であります。

偈の前半は、ひとりのひとが、永遠の寿(いのち)と光をもつて生き続ける阿弥陀仏になるまでのいきさつが語られています。

それは、二千五百年前、インドにお生まれになったお釈迦様によって説かれた『無量寿経』(永遠の寿の物語)というお経のおはなしです。

後半は、その永遠の仏のころを「南無阿弥陀仏」という真実のことばによってあらわし、伝えて下さった三国(インド・中国・日本)の七人の高僧(龍樹、天親、曇鸞、道綽、善導、源信、源空)をたたえておられます。

「なむあみだぶつ」に込められた仏教のころとは、はてしない「いのち」の深さ、広さ、重さを願いにあらわし、真実のころと

言葉によって呼びかけるものです。この『正信偈』は、現代における私たちにまで「なむあみだぶつ」を贈るために書かれた詩です。

今、私たちが『帰命無量寿如来』と、お勤めしている、この勤行の仕方は、本願寺第八代上人・蓮如が定められたといわれます。

このすばらしい伝統のお勤めをするとき、私たちは、仏さまの智慧と慈悲をいただいで生きられた親鸞聖人の深い感動が伝わってきます。

### ご門徒の皆様へご案内

新年を迎えられて気持ちを新たにされておられると思います。真宗では仏法を聴聞することが「人として生まれた意義と生きる喜び」を感じる第一歩になります。

来たる二月二十一日(月)安楽寺坊守が名古屋別院にて法話を勤めることになりました。お時間の都合がつきまじたらご参拝いただければ幸いに存じます。

真宗門徒になるための本

大垣教務所発行 ご希望の方進呈

いつも「安楽寺だより」をご愛読頂きまして誠にありがとうございます。

いよいよ親鸞聖人の御遠忌の年を迎えました。聖人の歩まれた道を訪ねていくと一人の人間が悲しみや苦しみの人生をどのように受け止め、すすんでいかれたかを知ることができます。

真宗にご縁を頂いた私たちは「御遠忌」を聖人のおこころに出遇うまたとない機会と喜ぶと共に、かけがいのない自分の人生を見直す機縁と致したいと思っております。

このたよりについて、ご意見・ご要望がございましたらぜひお寄せ下さい